

# 南會の神秘境

## る探を境

文 畫  
小 熊 田  
林 金 次  
大 三 郎



### 拓け、南會の寶庫を！ (1)

ここに「南會の神秘境」と言ふ猪苗代湖を中核として二つ折にしたのは、既に南會津郡といふ一小部分に合つた左半分、福島縣西半部を指すのではなく、所謂南會津といふ意味するものと考へて置きたい。大なる區域も福島縣地圖を参照して九十里餘に達する走路を

容は北會津から南會津、南會津から大沼、大沼から河沼と四つの郡を過ぎてゐるのである。世の中にはよく「寶の持腐れ」といふ言葉がある、所謂南會津といふ處はさうした世界である、然しながらこの寶は決して死んだ寶ではなく、年を過ぐるにしたがつて増々生々としかもふくれてゆくばかりの寶物である、故に今まで寝つてゐた私たちは自然的に貯蔵作用を行つて居たもので、一面から考へればこれ又「氣まぐれ功名」であつたともいふことができる。だからといつてこれからは安閑と眠つてゆくことはでき得ない。南會津を利用する時代は明日に迫りつゝあることを自覺しなければならぬ。

◆福島の經濟が困難だといふことは南會津の財寶を無視してゐるのである、即ち活眼を持たなかつた時代の言葉である。然し一度南會津の地に一步踏入れるならば人々は天をも暗くしてつゝ立つてゐる大森林と峻山の洪水に襲はれてしばらくは塵も出ないではあるまいかと思はれる。こゝまで讀まれる方は「然らば何故縣はこれに氣付かず居るか？」とお考へになるに違ひない。其處だ「隠しものは其處だ」

◆これらの天地は一日も早く私たちの来る日を指折り懸へて待つてゐるのだ、私たち以外の人々によつて騙はれてゆく處女の美しさを悲しんでゐるのだ。行かう！人々よ、高らかに「南會行進曲」を歌ひつつ、

路は遙かに七十里、  
けふは寶の峰の上、  
明日は寶の分け、  
雨の雫、我はゆく

知るや珠の山の空、  
知るや無畏の登き湖、  
水邊に響るる白鷺、  
鹿の鳴へ我はゆく

探し求めん山の窟、  
訪ひて隠らん水の精氣、  
奇しき鹿の傳説、  
鹿の鳴へ我はゆく

三島縣令禮讚

働くと罰せられる

村の話

写真

三島縣令

羽織に三両

かみしもに五両

保科公を欺した

余松の狐

南會の神秘境

る探を



文書 小田熊 林田 次三郎

日光街道挿話 (2)

三島縣令禮讚

現在會津松本市を發して田島方面へゆく唯一の道路を日光街道と云ふ。往時之は石村から藥師室一丁目一宮内一地藏堂一大地蔵堂一南原守八幡神社一東北一南原一香盤一本能一關川橋一小區村一舟子

氏はその迫撃と大反撃をしりぞけあくまでその剛直な態度を貫くとは無かつた。庶民はこれがために縣令の施政改革を幸甚なりと喧嘩し或は郡れと怒み、罵詈雑言。三島縣令は然し「やがて来るべき光明」を持つて心中に黎明の微笑を秘してゐたであらう。約二年を費やしてこれは完成した。

「働くと罰せられる」そんな馬鹿なことがあるものか、といふ人があるかも知れない。だが北條郡の畑地地方では

六月六日は雷神祭で休む。然し忙しき時はこれを廢して其の仕事の終了後には「飯れ休み」「早飯」と稱して休むことになつてゐる。休日と言へば午前八時までは働かしてそれから後を休息するのである。昔は太鼓によつてそれを合點したといふ。

「おい」と呼べば「おい」と言ふのはこたま。ゆく事も遅く事もなからなくなつた我、これは又と

思ふに三島縣令若しこの時なかりせば、又三島縣令ありとしてもこの仕事中絶したならば恐らく今南會津における文化文明の器に達し又南會、北會共に現在の隆盛開拓の光明を見出すことは未だ遠ざかつてゐたであらう。

私たちは三島縣令を禮讚する。日光街道と稱してゐるか日光は未だ何十里の雲の彼方である。私はこの街道を永久の記念として「三島街道」と改めて呼んで置きたいと思ふ。

「羽織に三両かみしもに五両」

保科公を欺した

余松の狐

現任もこの風習が行はれてゐる。然しこれは「朝から晩まで働いて」「朝から晩まで働いて」の意を意味するのでは決してない。この地方では休日の朝が厳格と行はれてゐて労働と休息の区別がはつきりしてゐるのである。休日は毎月朔、十五日、二十四日の三日は古來からの風習。この外五節句、五月六日、

ちにはこれは法度となり、或は酒を嗜はしめ、或は賭金を徴せられる。即ちこの「道具屋」の制度は「よく働きよく休め」を標榜すべき美的古風である。

現代に於ける「労働者開放」の時「労働者開放」店公休制度等の叫びは強にたくても無いのだ。昔の人は全く現在の博士以上の生理どうかは知らない。

保科公を欺した

余松の狐

た余松の狐

昔大川の沿岸と言ふから、その所在は何處とはつきり指すわけにはゆかない。たゞ馬越橋から三丁餘の余松といふ松林の出来ごとであつた。この松林にはいつも深山の雫が出た時は真永の頭保科正之公は多くの部下と共にこの余松の林の中で狩野をなされた。

秋は正に半ば、山間の楓は鮮やかに紅葉し、谷の流れはさらさらときこえ、森には小鳥さへ鳴いて全く良い景色であつたらう。

保科公も餘りの美しさにみとれて一本二本と取る中、部下には「おい」と呼べば「おい」と言ふのはこたま。ゆく事も遅く事もなからなくなつた我、これは又と

うしたことかその林の奥から嗚りしい一人の娘が静々と現はれて来て保科公を見てにつこりと微笑んだ。保科公も相手が相手故にばつたの悪い微笑を返したに違ひない。すると娘は「どうぞ妾の髪までお越し下さい」と言ふ。保科公もこの際だから仕舞を担す「左様か然らばよろしく頼む」とその後に従つてゆけばこれは又會つて見たこともない綺麗な御殿に着いた、しかも今の娘はこの御殿の召使ひで、この御殿の主といふのはこれまた素晴らしい美人である。

# 南會の神秘

## る探を境



文 畫  
小 林 金 次 郎  
大 田 熊 三

### 湯の上温泉附近 (3)

**朱千ばい金千ばい**  
湯の上温泉の西北一里餘に小野山といふ山がある。一名冠山と稱し朝日長者といふ豪族が住んでゐたと傳へられてゐる。今もこの山の頂上にはその城跡が残つてゐる。

大戸岳と相峙して風の掃が度り

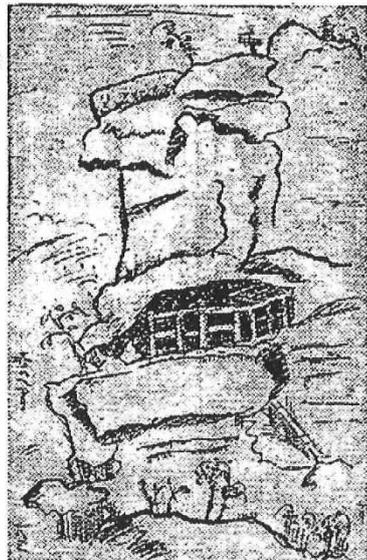
秋の紅葉の頃は金山峠と黄の嶺に包まれて非常に美しい。朝日長者の息子に猿鹿呂太夫といふ歌人があり狩が又上手であり、牛に穿つてはよく下野の方までも下つて行つたといふ。

この男は何でも小野小町と部分關係らしいが一體どんな折合

があつたのか餅つきり分らない、歌人であり又武人でもあつたが、又奇人でもあつたに違ひない、この山の頂上の朝日長者の木の下に朱千ばいと黄金千ばいとを埋て死んだといふ。

◆：ところが上には上があるもので、この傳説の變物を掘り出さうとわざわざ東京から一昨年尋ねて来た研究者があつた、ところで掘れどもいづつかぬ遺物が出ず出るは石ころばかりだつたと云ふ朝日長者とははるまじく言つたものだ、猿鹿呂ともあらう人がさうた容く見付けられるところへ驚を置く分もなからうに、この小野山の中腹に小野長者があり此秘起を知る唯一の手がかりに「露口」がある先平岡島中腹の細江船太郎先生がこれを檢べたところ關國平國の（約六百年前）彫刻があつたといふから足利時代頃の建立と見ることが出来る。この築造は舊六月二十五日で大賑はひを呈するのであるが最近、盛電工事の掘地工事で鮮人々支那人の丈夫の入込んだために、それもいささか衰へぎみになつてゐるとは残念である。爾來この地方には村之居やら歌の會などあり玄女節を唄ひつゝ酒を流んでは夜の更けるまで山星の玄女

(3)



を舞ひて月の下に懸るといふ風流があつたが今は何時かそれさへも跡をとよめず既に玄女節のみが松を吹く風の如く寂しく會津の地に残つてゐる。

玄女歌は源女見たさに  
清水を汲めば  
源女かくしの翳が吹く。  
(俗語)

**塔のへつりと石川啄木**

湯の上温泉より三島街道を南へ

く似てゐると思ふ。奇岩、それは何れも層狀の餅つきりした水成岩の大岩に無數の孔が開いてゐる。其の昔はこの數丈の岩石に露の花が一面に絡み付き、山つゞじの花もこれを懸懸してその下には美しい谷の流れが白波を碎き、時々にきらきらと銀色の暈をひるがへす姿を眺めながら眺めてゐるときは如も天に映はれてしまふ體であると言ふ。

◆：折廻しく廻行つた私たちに

に奇岩が屹立してゐるわけであるが、この間を辛うじて通れてゐるのは藤原橋といふ古い橋である。この橋のたもとに岩の上の左手に墓石らしき丸石が一つ立つてゐるが、これが一説であるかは知らない。この橋を渡ると向ふ岸の岩洞に觀音堂がある、木柵で圍んだ俵々物々しいかまへであるが、足を入れると岩の凹み、奥行二階に開口を閉ばかりの中に小屋が一つあり、この中の觀音様は一つは首をもがれ、一つは手も足も缺けて残つてゐる。

だがその後の板には石川啄木の歌がある。

東海の小島の磯の白砂に  
我泣きぬれて  
誰とたわむる

なんでも海軍兵がこゝを訪ねてきて書いて行つたと言ふが、啄木がこの觀音様に祭り上げられてゐるのを知つて地下の啄木はさぞかし苦笑してゐるに違ひない。

げに啄木よ幸なるかな、若き人たちが一つ驚愕らしい歌を呼んで觀音様になつて見る氣はないだらうか。

**塔のへつりと長沼一雄氏**

塔のへつりに遊んでこの景色に酔

ひ、清流を下に三伏の夏を忘れやうとする人々は、この塔のへつりの魁人長沼一雄氏を忘れることはできないであらう。

自然は放任して居ればいつか荒れてゆく。この塔も明治維新以後には朽木が變成し、所有權も個人に歸したために年を追ふて破目に毀つた。かくて荒れるまゝに明治四十四年の暮に到り、この村の有志長沼一雄氏はこれを悲しんで自らこの保衛を主唱し第五島の有志と財團を組織し個人の手より三千余坪を買収して始めてこれを自然の手へ返したであつた。

そしてこゝに始めて公園らしき森を作つたのである。又長沼一雄氏は白岩の地とへつりとが急流大川によつて壊られてゐて交通不便なるを知り、若松屋敷裁判所像裁判所能倉虎澤氏の援助を得て、五百餘圓の寄附を募り、明治四十四年その間に橋を渡し、これを藤原橋と名付けたものである。勇將に士卒あり、奇蹟に墜れたる有志なくして、今日の名を如何にしてから得たであらうか。

**ス。ケ。ツ。チ**  
啄木の歌を記る 観音堂の岩洞

# 南會の神秘境

## る探を境



文書 小栗田 三郎

### 生活に根ざす傳説

南山義民小栗 山喜四郎

何れのためか、何れのためにも、  
人々のために身を犠牲にへととして  
した白装の土は多い。けれどもも  
海は世の習ひとしてさうした  
命の士の魂を穿つる人も何時し  
の如く草の中へ隠れてしまふので、

こゝに置らうとする小栗山喜四郎  
も又さうした運命に覆かれた人  
である。

田島町の西南に山崎の鞍馬野  
崎として墓も遺蹟も残るとい  
ふが、三木の塚が一つある「南

山喜四郎」も墓も残らずに  
花すら入さず、跡

ぬるものは雨風と太陽のみ南山の  
義民と仰がれた英士も今静かに眠  
臥してゐるのである。  
◆時は季候、勞れる程の境  
墓に立ちくものは数知れなかつた、  
南山の度夫小栗山喜四郎はこの鏡  
くの村民を救はんがために己れを  
投げ捨て、五萬五千石の巨額を  
懸けて、遂に警察の中に呻吟する  
村民を救済することができたので  
ある。

義人を慕ふ人々は数知れず、  
彼の骨を埋むる窟窿の山も花と香  
煙に包まれたことであらう。夢は  
空し、今寂しく寝る義人。  
幸なるかな天は義入小栗山喜四  
郎を見捨てなかつたが、悪徳を  
ふせむの魂は小寺平八氏を會長  
として義民會を組織してその碑を  
建立せんことを誓ひ、今工費五百  
圓の基金も募り、材料も都出來し  
たといふから、建設委員たる各職  
長の機軸により小栗山に安らかな  
る夢を興へられる日も近いこと  
であらう。

### 孝女おさいの淵

福津に住む人々の美しき伝説  
に於いては幾回となく繰り返した  
が、それでは十八人が十八人すて雪  
の如く美しき心を結ぶものかと言

へばさるばかりはゆかないもので  
ある。  
花には朝、月に雲、花の簪には  
露もかくれてゐる。  
和田前の大川といふ所、へ瀨の  
上より南へ下る和田に、作蔵と  
その性質を異にする多情な女で、

◆この女は貧母とよとは全く  
異なる。母を呼ぶ姿を見かねて、  
第一の母おあきを後妻に迎へたの  
である。



い「がまだ幼くして母よ母よと  
無邪気に母を呼ぶ姿を見かねて、  
第一の母おあきを後妻に迎へたの  
である。  
◆この女は貧母とよとは全く  
異なる。母を呼ぶ姿を見かねて、  
第一の母おあきを後妻に迎へたの  
である。

作蔵は冬半東地方へ相違ぎにゆ  
くを幸ひに他の若い男を引き入れ  
て毎日溢なる生活を続けてゐた。  
それにつけても「おさい」の家に  
ゐることはさうした彼女の生活には  
邪魔もので仕方なかつた。それ  
で暇さへあるれば「おさい」を賣め  
て一人として「おさい」を賣る者  
となつてゐた。おあきの不  
行跡を口に出すなと責めつけて  
た。「おさい」は母の美しい血と  
肉と魂を受けた故に妻はあくま  
でけんか、心は百合の如く潔白な  
るまじに成せしてやがて二十才の

作蔵は冬半東地方へ相違ぎにゆ  
くを幸ひに他の若い男を引き入れ  
て毎日溢なる生活を続けてゐた。  
それにつけても「おさい」の家に  
ゐることはさうした彼女の生活には  
邪魔もので仕方なかつた。それ  
で暇さへあるれば「おさい」を賣め  
て一人として「おさい」を賣る者  
となつてゐた。おあきの不  
行跡を口に出すなと責めつけて  
た。「おさい」は母の美しい血と  
肉と魂を受けた故に妻はあくま  
でけんか、心は百合の如く潔白な  
るまじに成せしてやがて二十才の

生活に根ざす伝説 (4) 続き

孝女おさいの淵

山家の風流

つた。作賊は勿論村人からそれを  
き、又自らもそれを知らながら元  
來の貧弱からどうしても「おまき」  
を追放することはできなかったの  
である。「おまき」はさうして「お  
さい」の身に同情が集り、又作賊  
もうすく自分の悪行を知り、そめ  
たことを隠付し果ては或る夜作賊  
を掩殺しようとしたのである。  
これを知った「おさい」の怒きは  
一方ではなかつたが、さればとて  
母を大罪人にするに忍びず、され  
ばとて父を見すく毒殺されてゆ  
くを見送すに忍びず遂に意を決し  
て細々と密置を置いて父へ送り、  
母へも又「不幸をお許し下さい」  
と謝してその夜和田前の大川へ身  
を投たのである。

大川の淵に咲いた花、それは餘  
りにみすばらしい體裁であつたか  
も知れない、しかしこの小さな花  
の残していつた芳香こそはこれか  
ら幾代の間この地を匂はせてゆく  
ことであらうか。

◆この傳説を終るに當り注意  
したいと思ふのは古來こうした物  
語りは家庭小説などに多く取入ら  
れた古型である、で私も幼い時分  
さうした話に興味をもつて聞いて  
ゐた時分は別に不審も感もなかつ

たが、次第に世の中が分つてくる  
と同時に抱いて来る疑問は、よく  
さうした孝子やまた可憐なる子供  
の父親は遠く旅へゆくとか川渡ぎ  
にゆくとかよきまつてゐたもので  
ある、それで自分もさうしたプロ  
ットは故意にその話を悲劇に轉じ  
せしめて読者の情を讀者にそよら  
せるものだと思ふ様になつた。  
でさうした話にはみんな、按  
配の作り事と考へてゐた、ところ  
がこの兩齣津へ来て見ると、さう  
がこの兩齣津に子供らが置かれるのは  
突然止むを得ない事であることを  
知つたのである。即ち半年雪に閉  
ざされてゐるこの國の人々はその  
生活の責を得べく冬季は他の暖國  
へ、近くは福島、越後、日光等の  
方面、遠くは江戸表へ出立してな  
ければならない運命を以てゐるの  
である、それでさうしたプロット  
は決して作者の頭のみから出て來  
たものでないことを知るのである  
即ちこれらはさうした山國の生活  
状態を暗に知らしめるものなので  
ある。

◆山國の話が出たからついでに  
又一つ生活状態の一端を露  
べて見たい。  
それは此地方では非常に動感で

男女共に未明より深夜まで汝々と  
して屋外に眺くのである。さうし  
た勢の結集、炭焼く人の子供な  
どは全く四五歳までは親の顔を知  
らない者があると云ふ。それはさ  
うだらう、朝子供がすやすやと寢  
入つてゐる中に親は野へ、山へ、  
鑑きにゆき、夕は子供が御飯を食  
べながら眠つてしまふ頃やつと家  
へたどりつくのであるから、子供  
を抱くことのできるのはほんに短  
い間、いや全くない時もあるであ  
らうから。

それ程一心に眺かねばこちらの  
人は安心して生活ができないので  
ある。

山家の風流

ツケ

塔のへつり遠廻  
通かに見ゆるは  
馬見橋

それならば山國は倦まで忙しく  
眺くことのみを求めて樂しむこと  
を知らざるかと云ふと、決してさ  
う言ふわけではない、もつとも山  
家の秋の月、夏のうぐひす、春の  
八重櫻を見る里人にも日本人とし  
ての風流がなければならぬ。  
この彫版に櫻を繪て、八重櫻か  
九五か、座敷を照らす結核か  
縁に結んだ結核

湯の花温泉の民情・史蹟 (5)

お湯で米搗く村

「石湯外観」

南会津町奥会津博物館提供



「石湯」

南会津町奥会津博物館提供



画 湯の花温泉

南會の神秘



る探を境

文書 小田熊 林田 金田 次郎 三大

湯の花温泉の民情・史蹟(6)

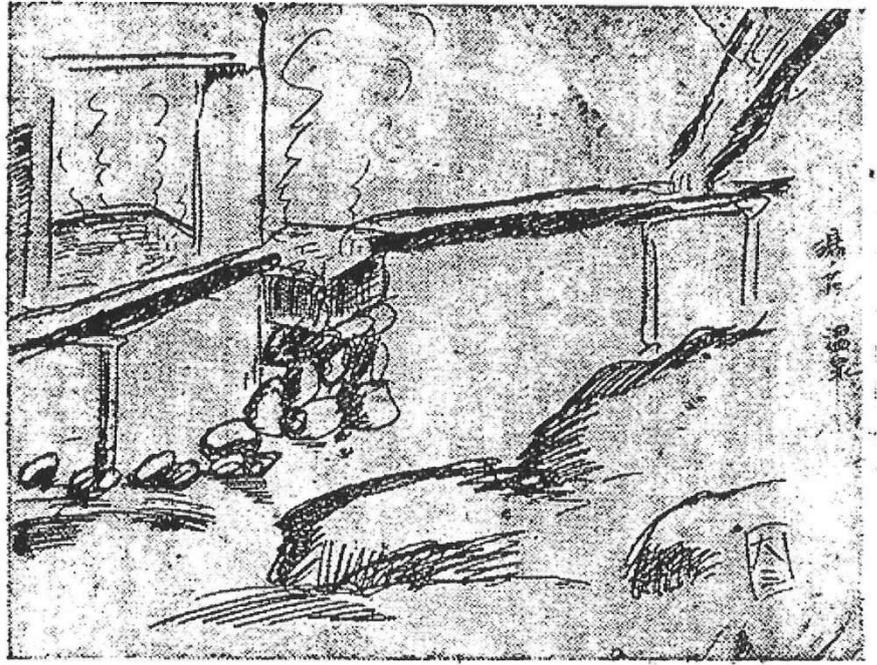
お湯で米搗く村

田島町から約八里、中山峠を越えて南へゆけば湯の花といふ美しいに月動車が間もなく通ずるから

山賊の温泉がある。

部の温泉として良い温泉場になると思ふ。
◆...この温泉の特長とするところは其の湯の潮出量が非常に豊富なるために積が六つもあるが常に満々と溢れてゐる、俗によく「溢まる」と言はれてゐる、面白いのはこの湯の利用で、先づ驚いたはこの温泉の湯で米搗きをしてゐることである、温泉で搗く米だから其味たるや「ラヂウム、イマナオチン」分を含むこと請合であるも一つ面白いのはこの湯を更に温床に利用してゐることである。それ全く簡単なもので箱の中に苗を植てお湯の流れるところに僅けば自然に温床の役目をしてくれるわけである。

さよー
◆この地方の産物の主とするものは木工業である、木地挽きと稱



して會津漆器の約三分の一の材料を抽出してゐる、會津の人々は南會の人々をいかにもすつ端に見てゐると言ふが、この地方の原料を受けることがないならば彼等たちは決して貧乏々々生活は出来ない筈である。
惜むらくはこの地方民が保甲歴變的で更に向上心に乏しく自らの産物に就いて少しも改良進歩を計らうとしないことである、それは丁度棉花を盛んに輸出して、それと原料とした布をまよふて平氣でゐる印度の人々に似た點がある。村税も仲々完納し難い今日、小學校數體も半年も支拂ふことの難い現代、湯の花地方民たらよ、君たちは早く自ざめねばならない味増も醤油も自らの原料で自らこれを作れ、そして金銀の流出を阻止して木地の改良を計り野外的利益を收得して新しき文化村を建設せよ、湯の花温泉は君たち自身のものだ。
スケッチ 湯の花温泉

# 南會の神秘境

## る探を境



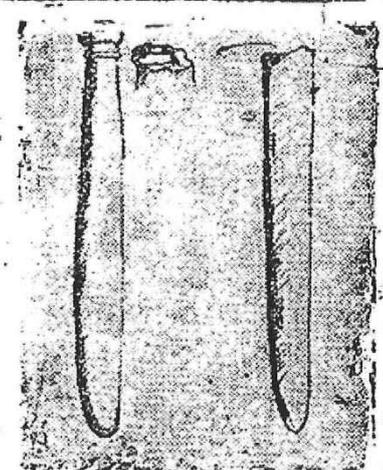
文書 小林金次郎 雲井龍雄

### 湯の花温泉の民情・史蹟(6)

#### 古代石剣と雲井龍雄の書

この湯の花温泉の近くに原と宮ふ原がある。この原には直徑十餘許りの何人とも名の知れぬ人々の塚が五つ六つある。此處から見

て古來この地方にこの温泉を中心とする部落があつたと考へられる。殊にこの村より約一里木崎峠を越えんと、釜山がありこゝに郷社釜山神社が祀られてあるが、この郷社を尋ねると、源義家がこ



花温泉に湯治したとか言ふ等、興味多い史蹟が發せられて居る。又この湯の花温泉附近の田畑から掘り出される石器類は非常に多い。

の地方の戦ひに敗れて苦悶しつゝこの釜山に來り、勝利をこの釜山に祈るべくこの神社を祀つたものであるといひ、木曾義仲の所屬の將、幡は奉旨位で、長さ六尺近くのものがある。武裝した騎馬の八幡太郎の一丈八分の金像があるといふ點より見てかなり古くからこの地方に文化が入つて以てゐたことが察せられ、又義仲の書から押して高倉宮以仁王の來遊の遺蹟をしのぶ財寶にもなるわけである。又この神社には那智國大の玉の銅板が二枚(何れも三寸に五寸大)あると言ふ。會津藩の武士、原直樹といふものが維新の英雄雲井龍雄と共にこの地の豪家「山丸」方へ投泊して湯



「寫眞説明」  
一 石剣二振、右鉄色、左象牙色  
雲井龍雄の書

の花温泉に湯治したとか言ふ等、興味多い史蹟が發せられて居る。又この湯の花温泉附近の田畑から掘り出される石器類は非常に多い。私たちの旅行で直接手に取つて見たものは、石の劍二振り、と石矢であるが、石の劍は明治二十三年十月十五日館村字岩間戸原の跡地整理に際して地下四尺下より掘出されたものでこの發掘者は「大山五作」といふ百姓さんである。何れも完全なるものではなく一つは鉄色を帯びた長さ一尺二寸、直徑一寸五分位の丸柄の柄でも一つは象牙色の劍先でこれは約一尺餘りのものである。これが若し完全なるものであるとすれば凡そ長さは四尺位になるだらう。一體これ程の重量の劍をどんな男が振り廻したのかと思ふと、とても愉快でならない、がさてこれを何に使用したかは一寸想像もなつかない。

◆次に石矢であるが、太古の石矢とは柄の無い矢であつたらしく、たゞ弦の上に尖つた石塊をつがへて飛ばしてやつたのだらうと思はれる。と言ふのはこの湯の花温泉源流館の直ぐ南手の田畑の中から湯山の石の劍が拾はれる、それが一つや二つが散らばつてゐるのでなしにざく／＼と拾ふことができるのだから若し如何に激戦なりと云へども僅かこの畑の中にのみ石の矢が飛んできたわけでもなからう、さうするとどうしてもこれはこの畑の邊りが石矢の倉庫か貯蔵所であつたではないかとも疑問を抱くことができるのである。疑するに昔、恐らくは原始時代の合戦の準備として何者かこの邊りに山荘を構へて、敵の者を攻

◆次に取られたのは二尺四方位の厚い書紙に「龍」といふ草書體の字が只一字墨々と書かれたものである。この左脇に雲井と小さく書かれてあるところから見てこれは雲井龍雄の筆であると言はれてゐる。

紙も所々處に喰はれてゐる點などから見て相當年月を過ぎたものらしく雲井の筆とや、決するがまだ紙の質と墨の色とに幾分疑ひの點がないでもない、然し何れともあれさうした記載のものがこの地から發見されてゐることはこの地が何らかさういふことに因縁付いてゐる事は疑ふ餘地は無いと思ふ。雲井の書は昔は一振りの劍と共にあつたものだが、其の行方のみは吾として知るべくもない。